様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（B）
研究期間： 2007～ 2010
課題番号：１９３３０１６８
研究課題名（和文） 幼児教育から小学校教育への移行過程の検討

研究課題名（英文） Examining Transition Processes from Early Childhood Education to Elementary School Education

研究代表者
秋田 喜代美 （ Kiyomi AKITA ）
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：００２４２１０７

研究成果の概要（和文）：
本研究は幼小移行を園文化から学校文化への移行という文化的観点から、3 対象調査により検討を行った。第１は、描画と面接での短期縦断卒園前と入学後の日本と台湾の子どもの比較文化調査である。幼児の不安は仲間関係や生活全般であり、台湾が学業不安が高いのとは対照的であった。物理的差異から文化的規範の差異の認識に時間がかかることも明らかにした。第２の保護者縦断質問紙調査の日台比較からは、日本の保護者の方が基本的生活習慣・集団生活・情緒・人間関係への期待が高いことを明らにした。第３に幼小人事交流教師調査により使用語彙の相違、幼少人事交流での適応過程の相違を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This study examined Japanese children's transition from early childhood education to elementary school education through three different components. At first, the authors conducted interviews of children in Japan and Taiwan and surveys of parents before and after entering elementary schools to look for changes and differences of their perceptions, anxieties, and expectations of schooling. Japanese children tend to have more anxieties of peer relationships, learning, or school lunch, while Japanese parents would have expectations for basic life skills, group lives, emotional development, or peer relationships. The authors surveyed kindergarten and elementary school teachers, regarding vocabularies and pedagogical views, plus surveys of teachers who experienced exchange between kindergartens and elementary schools. It was suggested that kindergarten and elementary school teachers have different views at the level of their vocabulary and different trajectories of accommodating different school cultures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2010 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
総 計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：就学前教育

１．研究開始当初の背景
国際化に伴い、学力の問題が一層意識化されるようになっている。それに伴って、幼児教育のあり方、小学校以上の教育と幼児教育

との関連が特に問題とされるようになっている。OECD 発行の『世界の教育改革』(2000),”Staring Strong”(2002),”Starting Strong2”(2006)のいずれでも指摘されているように、幼児教育から小学校教育への接続時期とそのカリキュラム、教育方法、教員免許等のあり方は、生涯学習を形作る上での重要な問題とされてきている。そしてその接続のあり方の多様性もまた指摘されてきている通り、文化的、社会的な要因としての子ども観や教育観によって異なってきている。ヨーロッパ幼児教育学会（EECERA）では幼児教育から小学校への transition 研究は特集号を組んだり、多くの実証研究が 2000 年以後出されてきており(Fabianne,2002)、イギリス国立教育研究所（Nfer）においても、子どもと親、教師に対して、大規模な移行調査を実施し、その報告を 2005 年にまとめている(Sharp et als,2006)。筆者らは英国国立教育研究所の研究担当者を招聘しその詳細な報告内容を学んできた。欧米の移行研究では主観的な心理経験として教育の差異がどのような子どもにいかなるストレスや学習での困難を与えるかを明らかにしてきている。またアジア各国でもシンガポールが接続を意識し 2006 年より小学校１，２年を少人数学級に、また台湾でも教育課程基準の改訂、韓国においても５歳の無償化等が検討されてきている。

日本においても、今回の学習指導要領、幼稚園教育要領の改訂にあたっては幼児教育と小学校教育の接続が一層明確に記述されることになっている。しかし政策的には幼小連携やカリキュラムの接続が推進されているが、実際に幼児教育から小学校教育へのこの文化間移行が、国によってどのように異なるのか、またその移行を実際に経験している子どもと保護者、また両方の教育に携わる教師がどのようにこの移行を認識しているのかと心理的側面に関しては、大規模な縦断研究はわが国では行われておらず、実証研究がないままに教育政策や実践が進められているという事実がある。そこで実際に移行をする子どもと親への移行を追跡する縦断研究、人事交流等で実際に幼小の学校園の移行を経験した教師への聞き取りという移行する主体側の認識の検討という着想にいたった。

幼小の教師の差異に関しては、平成１６－１８年度の科学研究費基盤研究Ｂ「幼児期から児童期への教師の発達観の比較調査研究」（代表秋田喜代美）では、教師に焦点を絞り、実際に幼稚園での保育場面と小学校の授業場面のビデオクリップを作成し幼稚園教師７５名、小学校教師２２名の協力を得てそのビデオクリップを視聴して、思考を記述してもらう調査を行い、その記述の質的分析を行うことによって、小学校教師は幼児教育、小学校教育共にどのようにして指導するかという教師側の発言と教室全体の雰囲気、学習内容に言及することが多いのに対して、幼稚園教師が子ども自身の考えや自発性、仲間との関係を主軸に語ることが多いこと、また各ビデオクリップへの内容分析から教育・学習環境の捉え方の相違、教育の意図の認識と計画性の相違、遊びの価値認識の相違、幼稚園教師と小学校教師の認識の相違となる点が明らかになった（鈴木他,2005)。しかし小学校教員も幼稚園教師も学校間差、園差がかなり広く見られることもまた明らかになった。

そしてビデオ視聴時に同じ語を教師が使用するにも関わらず、使用される文脈は異なることから、「子ども中心」「教師中心」「子ども理解」等、教師が語りの中で高頻度で使用する８語彙を抽出し、その語彙の連想語彙を記述させる自由再生法により、幼稚園教師９２名、小学校教師１０１名を対象に調査を実施した。その結果として、たとえば「教師中心」という語の持つ意味を小学校では「指導」、幼稚園教師では「教師のペース」といったように差異概念が明確となった（野口他、2003,2004)。しかし実際に、それが幼児期から小学校最初の指導においてどのような相違となり、移行を経験する子どもと保護者はそれらをどのように捉えているかは明らかではない。また教師においても同一教師の移行経験による比較ではない。

また文化による教師の認識の相違については、平成１６－１８年度科学研究費基盤研究Ｂ国際学術「幼児教育における教師の保育観の日米比較文化研究；ビデオ刺激法による検討」（代表小田豊）において、日独米の教師の比較分析研究を実施し、米国６０名、ドイツ７４名の幼稚園教師と日本の７５名の幼稚園教師の同一ビデオクリップへの認識の相違を検討してきた（芦田他,2005)。

その中で日本対欧米という枠組みではなく、日本の教育の独自性を考えるために、アジアの中での比較の必要性を考えるにいたった。そこで幼児教育から小学校教育へとつながる教育方法として、プロジェクトアプローチに焦点をあて、2004 年、2005 年と２回東京大学でアジア幼児教育会議を行い、幼児教育における学習とプロジェクトアプローチを各国がどのようにとらえるのかという問題を、日本・中国・台湾・香港・韓国の５カ国の研究者で議論を行ってきた。

日本、韓国、台湾はいずれも急速な近代化の中で、小中学校教育において、アジア型教育といわれるような一斉型の効率的教育を、儒教精神に支えられて行ってきた典型的な３カ国である。その小学校教育への就学前教育としての幼児教育と小学校教育の接続のあり方の接続の問題を、移行者の側から実証的に検討することで、幼小教育の比較参照軸を得ることができると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、第１に、日本での幼稚園年長児 5 歳クラス 2、3 学期から同一集団の子どもが小学校へどのように入学し移行するのかという点を、保育ならびに教室観察と絵画と語りによる面接を縦断的に実施することによって、移行期の子どもの各時期の特徴を明らかにすることである。その際に、イギリス国立教育政策研究所が幼児の面接調査に対して採用している描画法とお話づくりの方法によって、子どもに幼稚園と小学校がどのような場として認識されているかを検討する。また、あわせてその子どもの保護者への２回の質問紙調査によって、入学前と入学後で、親の意識の変容や不安・期待の質の相違を検討する。

第２には、第１の点を関連して、現在人事交流制度によって幼稚園と小学校の両方を経験した教師を対象にして、園と学校での教育観や指導観、具体的指導行為等における教師文化の差異、移行に伴っていかなる経験が教師においてなされているかについて、調査を実施することである。

第３には、アジアにおける比較文化研究として、韓国・台湾における幼稚園から小学校への移行について調査を行うことである。特に台湾においては、子どもに対する縦断移行調査研究ならびに保護者の移行に関する意識を調査し、日本との比較検討を行う。その上で、アメリカ合衆国やヨーロッパなどにおける小学校への移行研究について示唆を得ることで、日本における幼児期から小学校への移行について検討を行うことである。

３．研究の方法

平成 19 年より 22 年までの間に実施した研究内容として、第一の目的に関して、幼稚園年長５歳児の 2、3 学期に絵画と語りによる面接調査を実施し、その後、同一の子どもたちが小学校へ進学した時期に再度同じ手法を用いて面接調査を行った。同時に、対象となった子どもたちの保護者に対して小学校の入学前後に質問紙調査を行った。それらの結果から、子どもたちが捉える幼児期の教育から小学校への移行について分析した。さらに保護者についても、幼児教育・小学校教育に対する認識を分析した。

目的の第２にかかわるものとして、幼稚園と小学校の間でなされた人事交流の経験者を対象に質問紙調査ならびに聞き取りを行った。特筆すべき事例として、京都市が取り組んだ人事交流について、詳細な検討を行った。また、乳幼児教育学会において、人事交流を経験した教員を招聘し、シンポジウムを開催した。さらに、ビデオ再生刺激法を用いて幼稚園と小学校の教師らに対して調査を行い、子どもの発達の諸側面と保育や教育がそれらをどのように伸ばしていくかということについて、量的・質的分析検討を行った。また、教師文化の醸成について、幼稚園教師がもつ語のイメージに関して、経験年数による変化を見いだすための比較検討を行った。

目的の第３にかかわるものとして、韓国における幼小連携に関するカリキュラムや制度改革について資料を分析すると共に、現場の教師や校長らに対して面接調査を行った。さらに、アメリカ合衆国と韓国の研究者を招聘し、日本保育学会においてシンポジウムを開催した。そこで各国の実践や日本における小学校への接続に関する現状などを交流し、意見交換をすると共に、日本のあるべき方向性について検討を行った。また、ドイツの研究者の報告により、小学校への移行の制度的・教育的流れについて検討を行い、アメリカ合衆国における移行研究についても、先進的取り組みをしている研究者を招聘し、小学校教育への移行について示唆を得た。

４．研究成果

幼児教育から小学校教育への移行過程の検討にかかわる４年間の研究を通して、日本の子どもたちが小学校へあがることについてどのように考えているか、あるいは保護者がどのように幼児教育と小学校教育をとらえているかが浮き彫りにされた。また、教育を行う側である、幼稚園教師と小学校教師の間に、教育観や指導観、発達観などに違いがあることも明らかとなった。そして、国際的な比較文化研究によって、日本の教育が特徴的にもっている状況と、他にさまざまなアプローチが考えられることが示唆された。

子どもを対象とした研究では、どのような不安を経験しているかが主な焦点となった。他者への不安、学習への不安などの他に、先生に怒られるのではないかといったものや、給食が食べられるのか、といったものまで、子どもたちのもつ不安は多岐にわたる。しかし、台湾などとの比較を見ても分かるように、日本の子どもたちは、教師に対する不安よりは、友だちと仲良く一緒に過ごせるかの方が重大な問題となっている。これは、日本の幼稚園や小学校が、子ども同士のかかわりを重要視しており、活動そのものに子ども同士の相互作用を促すような仕組みになっていることが要因となっていると考えられる。また、子どもの認識が、小学校での活動内容というよりも、物理的環境から入ることが多く、その後に活動や行動様式の相違の認識へと進んでいくことが明らかとなっている。子どもたちが最初に戸惑うのは、まず学校の大きさや運動場の広さなどであって、今まで幼稚園などで自分たちのサイズに合わせて環境が整えられていたところから、一気に高学年も含めた年齢の高い児童に合わせた環境に入

れられることが困難を生じさせる原因にもなっていると思われる。

これらの研究から、子どもたちが小学校という「場」に慣れることが重要であることが分かる。交流活動などで小学校の敷地に入るのは、移行をスムーズにするために一定の効果があると考えられる。しかし、不安の軽減という点では、友だちと仲良くできるかどうかというのが第一であり、その意味では入学当初に子どもたち同士がお互いの関係性を良好にもつことができるような工夫が必要であろう。子どもが学校に期待することとして、身体活動をすることを挙げているものが多かったが、最初の段階で机に座って生活上のルールを一斉に指導するのではなく、体育館や運動場で身体を使いながらお互いを知ることから始めることが効果を生むのではないかと考えられる。

また、保護者が経験する移行については、特に「基本的生活習慣・集団生活・情緒・人間関係への期待」は幼稚園の時よりも小学校の時に高い期待をもっているという結果が出されており、集団行動に向けた期待が大きく占めていることが明らかとなった。その場合、幼稚園の時の集団への適応度、教師への信頼などが大切であることが分かってきた。つまり、幼児教育の段階で、子どもたちが集団に適応していれば、保護者は小学校でも同じように適応できるものと期待できるのであり、幼稚園や保育所においては、子どもたちの社会性を育てておく事が結果的に小学校へのスムーズな移行を促進すると考えられる。

一方、教師の側としては、幼児教育と小学校教育は互いに異なる文化を形成していることが明らかとなった。人事交流などによって、教師自身が幼児教育から小学校教育への移行を経験することで、両者の文化の違いがより明確に捉えられる可能性があることが示唆された。今までの自分のやり方が通用しない場面に出くわすことで、これまで自明のものとしてあった教育に対する捉え方や考え方を再考する必要が出てくるのである。その中で、自己の専門性を生かすようにしながら新たな文化に適応しようとする姿が見られた。特に、小学校教師が幼稚園における学びの大切さや、その学びが遊びの中から生まれてくるという現実を目の当たりにすることは意義深い。そうした異文化への適応過程において生み出されたアーティファクトは、いずれお互いの文化を変化させるものとして作用するのではないかと考えられる。京都市の人事交流を経験した教員らが開発したスタートカリキュラムなどは、その好例である。

しかし、全ての教員が人事交流を経験するというのは現実的ではない。本研究の中では、幼稚園と小学校の教師が、まずは語彙レベルで考え方が異なっていることが明らかとなっているが、教師が自分たちの文化の中にあって、その文化特有の認識を形成していることに気付くことが必要であろう。子ども理解といったような、両方の文化で頻繁に使われている用語について、全くことなった解釈や前提があることを理解するだけでも、双方の間の溝を埋めるには有益であると考えられる。また、教育活動と子どもの発達についての捉え方も、幼稚園の教師の方が広く学びの可能性を捉えているのに対して、小学校教師は特定のねらいに沿って活動の意義を理解しているといったことは、子どもの活動に対する考え方の違いの一端を示している。それは、それぞれの強みであると同時に、お互いに学び合える可能性があることも指し示しているといえる。

小学校への移行の問題は、日本だけでなく、アジアや欧米の各国で課題となっている。その中にあって、それぞれのアプローチの違いがあることも、一連の研究を進める中で指摘された。韓国は、スタートカリキュラムの必要性を認識し、教科書を作成するなどして、全学校において子どもたちがスムーズな移行ができるように促している。また、台湾では、本研究から派生して手引書が出版され、幼小接続に関する方向性が出された。こうした動きは、今後も続くであろうと考えられる。

各国の先進事例から学ぶことができるのは、例えば台湾で行われているプロジェクト型の活動や学習である。幼稚園においても、プロジェクトが公立や私立の園で行われており、多くの実践例が報告されている。また、私立の幼小一貫校では、小学校卒業までを通した形で、プロジェクト型の学習が行われており、幼小の教育文化を一貫したものにしようという試みが行われている。今後は、日本においても幼児教育と小学校教育との間で、一貫した教育理念のもとで子どもを教えていくことが進められなければならないであろう。

今後の課題としては、幼児教育・小学校教育のそれぞれの段階において、保育・教育の質を問うような研究が必要と思われる。その際には、例えばアメリカ合衆国においてピアンタ教授らが行ったように、一定の基準で研究を一貫して行うことが重要であると考えられる。子どもや保護者、教師の捉え方だけではなく、クラスの環境をはじめ、教育の方法や質をその効果を縦断的に測定するような研究が望まれる。その上で、どのような教育が移行期をスムーズにするために求められているか、またそれがどれだけ効果があるかを見るような研究である。その知見によって、学校や園そのものが子どもたちの思いやニーズに応えられる、ready school として成

立しなくてはならないと同時に、社会全体が子どもたちの学びや育ちを支えていくような、ready society となることが求められよう。

今回の研究では、縦断的ではあったが短期間で調査を行ってきた。そこで得られた心理的なマイクロな視点では、子どもたちが経験する移行をとらえることができた。しかし、そこには地域ごとの文化や、個々の園・学校文化の視点を取り入れることはできなかった。また、子どもの主体性がそれぞれの教育活動の中でどのように発揮されていたかといったような視点では、接続や移行の難しさを語ることはできなかった。さらに、障がいを持った子どもたちが経験する移行など、個々の状況や背景に応じた知見も得ることができなかった。今後は、地域社会の文化や個人差、長期的な視野に立った縦断的な実証研究によって、幼児教育と小学校教育をどう改善していくかについて、具体的な提言ができるような研究を進めていくことが、我われの研究グループに課せられた使命であると認識している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 21 件）

①秋田喜代美「幼稚園・保育所と小学校との円滑な接続の意義」初等教育資料,856, pp.6-11,　2010　査読無

②鈴木正敏・秋田喜代美・芦田宏・門田理世・野口隆子・小田豊「ビデオ再生刺激法を用いた幼稚園・小学校教師の発達観の比較研究」,『乳幼児教育学研究』, 第 17 巻, pp.117-126, 2008　査読有

③椋田善之・鈴木正敏「就学前後の子どもが感じる幼小の違いに関する研究-5 歳と 1 年生時点での子どものインタビューを通して-」,『学校教育学研究』兵庫教育大学学校教育研究センター紀要, 第 21 巻, pp.23-31 2008　査読無

④芦田宏・秋田喜代美・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・小田豊「多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討－語頻度に注目した実践知の明示化を通して－」『教育方法学研究』 第 32 巻 pp.107-117 2007　査読有

⑤Hiroshi Ashida, Riyo Kadota, Kiyomi Akita, Masatoshi Suzuki, Takako Noguchi, Yutaka Oda, Lilian Fried, Anke König” Comparative Study of Perceptions of Early Childhood Education among Japanese, German, and US Preschool Teachers using Multi-Vocal Ethnography Method” International Journal of Early Childhood Education, Vol.13 No.2, pp.79-96, 2007　査読有

⑥」門田理世「アメリカの幼児教育―現状と課題―」初等教育資料１月号　pp.68-71 2007　査読無し

⑦野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田宏・秋田喜代美・小田豊「教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究－幼稚園・小学校比較による分析－」『教育心理学研究』第 55 巻, pp457-468, 2007 査読有

〔学会発表〕（計１９件）

①鈴木正敏・芦田宏・木下光二・廣内厚士、「他人のモカシンを履いて～幼小人事交流から保育を見直す～」、日本乳幼児教育学会第 20 回大会　発表論文集 pp.26-27 関西学院西宮聖和ｷｬﾝﾊﾟｽ　2010.10.23-24

②秋田喜代美　「教師の幼小文化間移行経験-人事交流が教師に与えた経験の分析―」日本教育心理学会第 52 回総会　発表論文集　P.764　早稲田大学　2010.8-27-29

③芦田宏・秋田喜代美・鈴木正敏・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊、「園文化から学校文化への移行(1)－子どもの不安と学校表象の分析－」日本保育学会第 63 回大会　発表論文集 p.378、　松山東雲女子大学 2010.5.22-23　＜ポスター発表＞

④野口隆子・秋田喜代美・芦田宏・淀川裕美・鈴木正敏・小田豊、「園文化から学校文化への移行経験(2)－親の認識の変化と子どもの及ぼす影響」日本保育学会第 63 回大会　発表論文集 p.379、　松山東雲女子大学　2010.5.22-23　＜ポスター発表＞

⑤秋田喜代美・野口隆子・淀川裕美・箕輪潤子・門田理世・芦田宏・鈴木正敏・小田豊「幼稚園から小学校への移行に関する縦断的分析(1)園文化から学校文化への子どもの移行経験,(2)移行経験による保護者の認識の変化」日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集 p443-444.　静岡大学 2009.9.20-22

⑥鈴木正敏・野口隆子・秋田喜代美・淀川裕美・箕輪潤子・門田理世・芦田宏・小田豊「幼稚園から小学校への 移行に関する縦断的分析（２） ―移行経験による保護者の認識の変化―」日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集 p445-446.　静岡大学 2009.9.20-22

⑦鈴木正敏・椋田善之、「就学前後の子どもが捉えた幼稚園と小学校の違いに関する研究」日本保育学会第 62 回大会、千葉大学　2009.5.17

⑧Kiyomi Akita & Yutaka Oda, ″Collaboration and Transformation of Activity Systems of Kindergarten-Elementary school： How teachers talk about boundary-crossing between two cultural systems″ paper presented at AERA San Diego. 2009.4.13-17

⑨Riyo Kadota, Hiroshi Ashida ,

"Illustrating Meanings of Going to Elementary School" From Children's Point of View" paper presented at AERA San Diego.2009.4.13-17

⑩Masatoshi Suzuki, Takako Noguchi, Junko Minowa, "Japanese kindergarten and elementary-school teachers' perceptions of children's activities in each setting" paper presented at AERA San Diego.2009.4.13-17

⑪鈴木正敏・野口隆子・芦田宏・門田理世・秋田喜代美・小田豊「幼稚園・小学校教師の発達観に関する比較研究：ビデオ再生刺激法を用いてー」日本乳幼児教育学会第１８回大会研究発表論文集　p32-33 2008.11. 東京学芸大学

⑫鈴木正敏・野口隆子・箕輪潤子・門田理世・高櫻綾子・芦田宏・秋田喜代美・小田豊 "Japanese Kindergarten and Elementary-school Teachers' Perceptions of Children's Optimal Development: an Analysis of their Responses to the Video Clips in each Setting", EECERA (European Early Childhood Education Research Association, 第18回大会, 3rd - 6th September 2008 (ポスター発表) Chicago.

⑬野口隆子・鈴木正敏・箕輪潤子・門田理世・芦田宏・秋田喜代美・小田豊, "A study on the Images of Practical Terms used in Teachers' Narratives of Their Practice: Comparative Analysis of Japanese Kindergarten and Elementary-school Teachers", EECERA (European Early Childhood Education Research Association, 第18回大会, 3rd - 6th September 2008 (ﾎﾟｽﾀｰ発表) Chicago.

⑭芦田宏・門田理世・小田豊・秋田喜代美・鈴木正敏・野口隆子・箕輪潤子、「幼小人事交流体験者への質問紙調査－交流形態の違いからの分析－」日本教育方法学会第44回大会　2008.10.12　愛知教育大学

⑮Junko MINOWA, Hiroshi ASHIDA, Masatoshi SUZUKI, "Transforming Teachers' Discourse over Transition from Kindergarten to Primary School in Japan: Video Viewing as a Research Tool" EECERA (European Early Childhood Education Research Association)　第17回大会, 2007.8.31　Praha

⑯Takako NOGUCHI, Riyo KADOTA, "Study on the images of practical terms used in teachers' narratives; Comparative analysis between kindergarten and elementary school teachers" EECERA (European Early Childhood Education Research Association)　第17回大会, 2007.8.31　Praha

⑰Kiyomi AKITA, Yutaka ODA, "Collaboration and Transformation of Activity Systems of Kindergarten-Primary School Presenters" EECERA (European Early Childhood Education Research Association)　第17回大会, 2007.8.31 Praha

〔図書〕(計５件)

①小田豊「倉橋惣三を通して学ぶ幼稚園教育の方法・内容発展の系譜」津守真、森上史郎編『倉橋惣三と現代保育』⑩　ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館、pp.61-80、2008

②秋田喜代美「保育」研究と「授業」研究―観る・記録する・物語る研究―」日本教育方法学会編　『日本の授業研究　下巻　授業研究の方法と形態』学文社, pp.177-188, 2009

③芦田宏「学校のしくみを探る」小田豊・森眞理編著『教育原理』、北大路書房、pp.56-62, 2009

④野口隆子「保育者の専門性と言葉」秋田喜代美・野口隆子編著　『保育内容　言葉』光生館　pp.133-145,　2009

⑤鈴木正敏「幼・保・小の連携カリキュラム」, 田中亨胤・佐藤哲也 編著,『教育課程・保育計画総論』, ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房, pp.133-164, 2007

６．研究組織

(1)研究代表者

秋田喜代美 (Kiyomi AKITA)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：00242107

(2)研究分担者

小田　豊 (Yutaka ODA)
国立特別支援教育総合研究所・理事長
研究者番号：50024998(H20～：連携研究者)

芦田　宏 (Hiroshi ASHIDA)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号：20222606(H20～：連携研究者)

鈴木正敏 (KMasatoshi SUZUKI)
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：90273820(H20～：連携研究者)

門田理世 (Riyo KADOTA)
西南学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：10352197(H20～：連携研究者)

野口隆子 (Takako NOGUCHI)
十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号：30383334(H20～：連携研究者)

箕輪潤子 (Junko MINOWA)
川村学園女子大学・教育学部・准教授
研究者番号：00458663(H20～：連携研究者)

(3)連携研究者

なし